

## オランダ領東インドにおけるメッカ巡礼者輸送業の成立

### —JAMS 関東例会報告より—

久礼克季\*

2008年5月17日、立教大学においてJAMS 関東例会が開かれ、國谷徹(愛知大学非常勤講師)により「19世紀末の東南アジアにおけるメッカ巡礼とインド洋ネットワーク」報告が行われた。

本報告は、東南アジアからのメッカ巡礼が、19世紀末、特に1870年代以降、スエズ運河の開通を契機とした蒸気船交通の発達によって爆発的な増加をみせたという事実について、それ以前から存在した巡礼者の移動に関わる人的ネットワークとの連続性という側面から蒸気船によるメッカ巡礼の発展過程を再考したものである。

報告の中で國谷は以下のように指摘する。東南アジアからのメッカ巡礼は、19世紀半ばまでアラブ系の商人ネットワークに乗ったかたちで行われ、蒸気船は用いられていなかった。その後、蒸気船会社である英領インド汽船会社(British India Steam Navigation CO.、以下BI社)がインド洋沿岸航路を開拓し発展させていったなかで、シンガポールを拠点とするアルサゴフをはじめとするアラブ系商人のネットワークはBI社の航路を利用して巡礼エージェント業を形成したものである。このように蒸気船によるメッカ巡礼が行われるようになった1870年代末、オランダ領東インド(以下蘭印)からのメッカ巡礼が急増した。しかしながら、これにともない巡礼者を輸送する船舶が不足したことによって遅延の発生や乗客の過剰積載といった事態が発生し、エージェント業者とオランダ領事とが対立するという問題も起こった。インド洋沿岸航路を利用した巡礼者輸送は、この時代に限界にきていたと考えられ

る。この一方で、同じ時期、スエズ運河の開通を契機として汽船海運業の発達が進み、BI社とオーシャン汽船会社に代表される汽船会社間の競争が激化する。この結果、蘭印からの巡礼者のジェッダへの輸送は、従来より大型の汽船を利用したスエズ経由による外洋の航路によって行われるようになった。更に1880年代初めには、オランダ汽船会社によって蘭印—ジェッダ間を直航する巡礼者輸送業が成立する。それまで巡礼エージェントの中心を担っていたアルサゴフらアラブ系巡礼エージェントもこれに共同していった。

本報告後に引き続いて行われた質疑応答では、巡礼航路と寄港地との関係、巡礼エージェントの活動の展開やエージェントどうしの関係、サポートをはじめとするオランダによる巡礼者の管理といった事柄を中心に、オランダとイギリスの巡礼者管理の違い、巡礼者と彼らの出身地の関係、ジェッダ—メッカ間の移動にかんする問題、巡礼に必要な費用、巡礼エージェントの金融的活動、汽船会社内における巡礼者輸送の位置づけ、1870年代のメッカ巡礼急増について蒸気船発達以外の要因の可能性、といった多くの話題について活発な議論がなされた。

以上のことから、本報告は、19世紀末の東南アジアにおけるメッカ巡礼の実態にかんして非常に多くの興味深い内容を含んだものといえる。またこのことは、近代におけるイスラムの展開を考える手がかりとなりうるもので、非常に意義の大きいものであるといえるだろう。

\* 立教大学大学院博士課程後期課程